

「天なる我が家」——田村幸太郎の生涯

2002年9月25日

田村 明

1. 封建都市・村上

北西の風が吹き付けてくると、大粒の雪の固まりがどっと降ってきて目の前が真っ白になって何も見えなくなる。今日も昨日も雪だった。雪は道の真ん中にうず高く積もり、家の一階からは出入りできない。雪の季節には皆二階の窓から出入りする。明治中ごろの新潟県が一番北にある町、村上の情景である。

現在では雪もめっきり減ってしまったから、もうこんな姿は見られない。それに、たとい雪が降っても、大型の除雪車が来て、主要道路の雪は朝までには取り除けてしまう。昔ではありえないことだ。随分と世の中は変わった。

幸太郎は、明治22(1889)年1月、こんな雪深い村上に生まれた。日本海に沿って一番北の端にある現在の村上市、当時の村上町である。明治22年は明治の帝国憲法が制定され、現在につながる市制や町村制が始まった年だ。村上町が制度的にはっきりした。新しく市という制度ができて、東京市をはじめ38の町が市を名乗るようになったのもこの年だった。明治維新が近代国家としての姿かたちを整えた年である。

最近、村上を有名にしたのは、皇太子妃になった小和田家が村上の出身ということだろう。雅子皇太子妃の祖父は村上の貧しい下級武士の家系だったが、「鮭の子」といわれる奨学金を得て高等師範学校に進み、高校の校長にまでなった。その子息が雅子妃の父親で外務次官や国連大使を務めた小和田氏である。村上の「鮭の子」の制度はかなり有名だが、この機会にまた知名度が上がった。「鮭の子」とは、三面川で稚魚の放流を行い、返ってきた鮭を取って得た資金を蓄えて、子女の奨学金に当てた制度のことである。鮭に育てられたのだから「鮭の子」というわけだ。

長岡の米百俵は他藩から貰った米の使い道を、一時の食いつぶしに使わずに、将来の子弟を育てる教育の資金に当てたというので有名な話だ。村上では研究開発の末に鮭の稚魚を放流して稼いだ金だから、継続性はあるしはるかに合理的で経営的だ。だが、後に述べるように、かなり問題もある。

村上もほかの町と同じように、昭和30年の昭和の大合併のときに、周辺をあわせて市制をひき村上市になった。人口は減少して現在3万人ほどの地方小都市だ。日本海の荒海に面する瀬波温泉もこのときに村上市に入った。昔からの堆朱という芸術的な漆器を産する。お茶もとれる。お酒を好きな人なら、有名な「越の寒梅」よりもいけると言われる「べ張鶴」がある。祭りの時に町内を引き回す京の祇園祭様式の「おしゃぎり」という山車も見事だ。いまは、まちづくりの面も積極的に行われて、全国の自治体の中でも個性的な町だとされている。それはよいのだが、反面、日本のなかでも、際だって特殊な町であった。特殊というのは極めて封建的な町だったということだ。

村上也幕末に二百数十あった城下町のひとつだ。代々徳川譜代の大名で固めている。始めは十五万石の榊原家がいたこともあるが、中期以降から幕末までは五万石ほどの内藤家が治めていた。封建的というのは城下町だからというのではない。日本の主な町はほとんど城下町だし、身分差の激しい徳川時代には封建的だったに決まっている。ここで言うのは明治以降のことである。

城下町は、城に領主がおり、それを中心に階級に応じた序列をもって武家屋敷が置かれる。さらに、その外側に町人町があり商工業を営んでいるのが普通だ。村上には標高 135 メートルの臥牛山、ぞくにお城山という自然の丘があり、今も石垣が残る城があった。徳川時代には一国一城制で、城山は使われなくなり、領主は城山下の平地の御殿に住む。その周りが高級武士の屋敷、その外側は中級、下級武士の屋敷だ。さらにその外回りに町人が住む。武家と町人とは、はっきり分かれて住んでいた。

ここまでなら、城下町の常識だし不思議なことはない。だが、村上が違うのは、明治から昭和になっても、ずっと武家屋敷の地域と、町人町の地域が、別々の二つの自治体の行政区域に分かれていたことだ。町人側は「村上町」、これに対して、武家屋敷側は「村上基町（もとまち）」だ。略称して「町」と「基町」と言う。よくある「元町」ではなく「基町」だ。一番基本になる町ということだから、はっきり上下関係を意識した名前だ。

もし第二次大戦がなかったら、いまでも二つの町に分かれたままだったかもしれない。二つの町は、物理的に離れているわけではなく、ぴったり接続していて誰が見ても一体の町である。それなのに、行政的には昔の武家町と町人町との間に厳然たる線をひいていた。明治始めの一時期ならともかく、明治 22 年に市制・町村制がひかれる頃になっても、自治行政の単位をはっきり分けていたような町は、全国を見ても村上町のほかにはない。武家も町人も一緒に一つの町を形成しているのが全国共通だったが、ここだけは特殊な町だった。

だから、戦前から戦後の一時期までは、二つの町では二つの小学校が別々にあった。敷地は隣同士でくっついているのに別な学校とは不思議だ。基町小学校のほうは、町の小学校よりも一メートル余り高くなっている。地形形状そうなるのだろうが、いかにも武士のほうが偉いのだぞと、いわんばかりの上段の間というスタイルだった。

昭和の始めまでの戸籍では、氏名の上に華族・士族・平民という区別が書いてあった。基町では全部士族だが、村上町の方は全部平民だ。だから、基町に住むものには、子供のときから優越感をもたされていた。親は村上出身でも、本人は全くの東京生まれの東京育ちで現に東京に住んでいる女性でさえも、戦後何十年たってからでも、「私のうちは士族だから」と言う言葉が自然に口にのぼってくるほど、差別意識が徹底的に仕込まれている町だった。士族という言葉は死語になっている時代になっても、差別意識が残っていた。人口は村上町の方が多いのだが、平民の町の子は、長い間、ことごとくに引け目を感じさせられていた。

何でこんなに二つ町に分かれたままに固執していたのか。それは士族たちが封建時代から持っていた特権を失いたくなかったからである。士族は、山林とか、三面川の鮭の権利とかを保有していた。これを士族たちだけで独占したい。町と合併すれば、その権利が薄めら

れ、いままで差をつけ蔑視してきた町人たちにも分け与えることになる。そんなことはしたくないということだ。

例の「鮭の子」という奨学金制度も「基町」のもの、つまり旧士族の独占だった。それを平民には渡したくない。いまはとにかく、村上町の子は、どんなに優秀でもこの奨学金は貰えなかった。逆に士族でさえあればどんな最下級でももらえた。だから、「村上には鮭の子というのがありましたね」というのは誤りで、「村上基町には」と訂正してもらわなくてはならない。

この差別による権利を保持するために、二つの町に分かれていたわけだ。第二次大戦中に、やむなく合併したときでも、士族の権利を自分たちだけで確保するために、別に財団を設立して鮭の権利などを移し、相変わらず旧士族だけの独占物にして、戦後になってからも続けていた。ほかに例をみない極度に封建的な町だったいわざるをえないだろう。

2. 誕生と養子

幸太郎の父は宮大工であった。田村五太夫という。村上の社寺のほとんどは手がけていた。日本海側は、北前船の交通も盛んで、日本の大動脈であり、京、関西方面とも直結していたから、そのほうの影響も受けていただろう。日本海に接する所は、江戸時代にはけっこう文化の大動脈のなかにあった。もっと北にある、鶴岡や酒田と同じだ。

幸太郎には三人の姉がいたが、男の子はまだない。一番上の姉とはかなり年が離れている末っ子だ。そこへ跡取りである男の子の誕生は、当時としては待ち望んでいたはずだ。だが、五太夫は幸太郎の誕生を知らないし、顔を見ることもなかった。生まれる前に現場の事故で亡くなったからだ。棟上の祝い酒でも飲んだのだろう。気になることがあってまた棟が上がった。こんなことは慣れているし、朝飯前のはずだ。ベテランといってもよい働き盛りの年頃だった。だが、つい足が滑って棟から落ちた。今度生まれてくると知らされた子供のことを考えていたのかもしれない。「今度も女の子かな、いや今度こそは男の子を産んでもらいたいのだが」などつついつい考えているうちに足を踏み外した。打ち所が悪くて、そのまま亡くなる。

「幸太郎」とは誰がつけたのか知らない。生まれる前に一家の大黒柱である父親を失い、その顔も知らないのだから、幸せであるはずがない。それなのに、あえて「幸太郎」と名づけたのは「だからこそ、せめて幸せに」という願いをこめてつけられたものだろう。

働き手である父親を失えば、一家はたちまち窮する。当時の家督相続制からいえば、長男が相続するのだが、まだ生まれてもいないし男か女かも分からないのだからどうしようもない。田村の戸主は母親が継ぎ、そのあとは長姉がついだ。

養子に貰いたいという人があって、幸太郎は生まれる早々に養子に貰われた。本人は全く知らないうちに「梅津幸太郎」と名が変わった。海津は、村上の人ではない。どこからか移ってきた人だが、理髪店を開いていた。いわゆる西洋理髪で、明治の中ごろでは、ハイカラの先端だったわけだ。むろん村上でははじめて。ようやく西欧化の波が進んできて洒落た

職業だった。今ならヘアサロンというところだろう。収入もそれなりに良かった。生まれる前に父親が死んだ話など、この狭い町ではあつという間に広がる。梅津は子供好きだが、まだ子供はなかったので、話を聞きつけて養子にと申し込んだ。普通、長男の家督相続者の養子は認められないのだが、すでに家督は他に相続されている。幸太郎はすんなり梅津の養子として入籍した。広くもない町のことだ。そう遠くもないところに実母もいたが、母親側の遠慮もあったろう。幸太郎は母親の味を知らない。ただ、年の離れた長姉は何かと気を使ってくれた。養父はかわいがってはくれるが、養母は余り子供が好きではない。幸太郎も養母には馴染めない。母親の愛情を知らないままに成長した。肉親の情の薄い淋しい日々だった。

3. 中学校へ進学

当時の学制は尋常小学校4年、小学校の高等科4年で、小学校卒業には八年かかる。義務教育は最初の4年だけだ。例の段差のついた下段の町の小学校に上がった幸太郎は、さまざまな差別を感じてきた。だが、梅津は幸太郎をかわいがり、そこそこ金もあったのだろう。よく物も買ってくれた。

何のためであったか。幸太郎は養父らと一緒に庄内から山形のほうまで旅をしたことがある。村上から山形県の庄内に向かうには鼠ヶ関を通る。日本海の荒海に近く、いよいよ陸奥の国に入るという淋しい関所だ。まだ鉄道もない。とぼとぼと日本海の荒海を横目でみながら歩いてゆく。野宿をしたこともあった。芭蕉も奥の細道の旅でここを通っている。幸太郎には日本海や関の淋しさと、奥のふかい見知らぬ陸奥への期待と不安に掻き立てられる旅だった。幸太郎の始まったばかりの人生も波の荒い、淋しい行方も定かではない。少年時代に経験した一番大きな旅は強く印象に残り、その後も旅に憧れるようになった。

幸太郎にとっては、生まれる前に父親を亡くし、養子に出されたことは大きな不幸だが、それが人生の方向を変えた。当時は、みな親の職業を継ぐ。長男なら当然のことだ。幸太郎も父親が生きていれば、宮大工の修行をしたことだろう。手先も器用だったし、背も高く体格もよかった。大工としても一人前になったことは確かだ。

この頃、小学校だけで終わらず、中学校に入るのはよほど特別な人々だけだった。幸太郎は本が好き、勉強が好きだったが、大工の子ならば学問は不要だ。だが、梅津は幸太郎が中学校へ行きたいと言うと、すぐに行かしてくれた。それだけの経済力もあったということだ。幸太郎には新たな世界に接し、道が開ける。

明治末から大正にかけて民本論を唱え、東京帝国大学教授として論壇で活座した吉野作造は、幸太郎よりもちょうど10歳ほど年長である。宮城県古川出身だが、そのころまだ古川に中学はない。作造は仙台の中学に入学するのだが、汽車で仙台に向かう。それを送るのに町の人々が総出で幟を立てて送っている写真が吉野作造記念館にある。今では考えられないが、そのころ中学に入るのはそれほど大変なことだった。今の大学に入るよりも、はるかにまれなことである。

幸太郎が中学に入るのは、明治30年代前半のことだが、この頃でも小学校だけで終わらずに上の学校に上がるものの割合は3%ぐらいしかなかった。いま50%も大卒に進学する時代とは全く違う。幸太郎は恵まれていたと言ってもよい。中学が村上町にできたのは、幸太郎が上がるやっとなんて4年ほど前のことだ。その前なら、新潟にしかない。新潟には通えないから、下宿するほかはない。それまでして中学にあがるのは超エリートだ。

中学になれば町にただ一つだから、士族平民の差はない。皆同じ学校にあがるし、村上以外の在の人々もくる。狭い町に止まらず、世界は開けてきた。年齢も今より中学に入るより2つほど上だから、満で14歳、卒業したときは満19歳になっている。いまで言えば、短大の年齢だ。それに世の中全体がずっと大人びていたから、中学生の高学年ともなれば、かなり大人の自覚があった。この時代に幸太郎は大きく成長した。

なんと言っても、今まで話し相手がなかった幸太郎は、中学で二人の親友をえた。大島三郎と中山敏雄である。3人ともいつもクラスの上位で成績を競っていた。大島は基町、中山は5里ほど離れた在の大須戸の出身である。

それに先生がいい。早稲田大学の文学部を卒業したばかりの岡村先生が赴任してきた。まだ全国の主な町にも中学校が行き渡らない時代に、若手の俊英が田舎の中学にも赴任してきている。例の「坊ちゃん」で有名な愛媛県の松山中学校に夏目漱石が赴任したのもこのころだ。漱石は明治29(1898)年、熊本の高等学校へは赴任するまでは中学の先生だった。それより数年遅れるが、岡村先生もそうした若手の先生の一人だ。後に早稲田大学文学部の教授として教鞭をとった。今の大学院などという制度はないから、優秀な学者の卵は、地方に来て経験をするのが、大学院にあたったのかもしれない。本と首っ引きというよりも、生きた生徒や社会に触れるのは、学者を育てるにもよかったのだろう。

岡村先生は新潟県とも村上とも全く関係がない。江戸っ子の漱石が全く関係のない松山に行ったのと同じだ。生徒にも刺激を与えたが、本人も大いに刺激を受けただろう。もっとも、坊ちゃんにあるように、生徒たちもけっこう罪のないワルサをしたようだ。新任の岡村先生を校舎の二階からはやし立て、物をほうったりした。だが、生徒はたちまち岡村先生の魅力に引き込まれてしまった。なんと言っても、東京の学校を出たばかりの若い先生は、知識も情報も豊富で魅力的だった。とくに田村、大島、中山の3人組は先生にすっかり傾倒してしまった。しょっちゅうまだ独身の先生の下宿へ押しかけた。先生と言うよりも、兄貴のような感じがあった。そこで、吸い取り紙がインクを吸収するように、貪欲に先生のすべてを吸い取った。後に、幸太郎が東京へ出てからも、先生の宅をしばしば訪れているが、師弟というよりもまるで友人のような交際が続いていた。人数も少なく、テレビもラジオもない時代に、先生の影響力は絶大なものだった。先生にとっても、田舎の若い生徒との付き合いはけっこう楽しかったようだ。

楽しいばかりではない。勉強の水準も高かった。ワーズワースやブラウニングなどの英詩はもちろん原書でよんだ。大体、中学の英語の教科書などはまだない。一年生から適当な原書を使って、英語を習うのだから、いまの学生よりもよほどできるようになる。幸太郎は

その後、英語を使う仕事をするのだが、その基礎は村上中学のときのものだ。それで、十分にやってゆけるだけの力がついていた。それに比べると、世の中が進んだのに、生徒の学力ははるかに落ちてしまったようだ。

岡村先生はなかなか洒落な人だった。ちょっと夏目漱石的だ。英文学が専攻なのに、江戸っ子の先生は、日本の伝統文化についても詳しかった。幸太郎がのちに歌舞伎などにもかなり傾倒したのは、このときの岡村先生から影響だろう。

4. 青年時代と教会

中学時代に、幸太郎は村上に新しく出来たキリスト教の教会に出席した。ここには、新しい西欧文化の香りがあった。幸太郎は一人教会の門を叩いた。「叩けよ、さらば開かれん」と聖書はしるしている。幸太郎は新しいものへの関心は強かった。

教会がいいのは、なんと言っても士族も平民も差別のないことだ。村上的な封建社会ではなく、神の前には平等だという。それに、幸太郎が嬉しかったのは、男女ともに集い、明るさと暖かさがあった。家庭的な温かさに飢えていた幸太郎にとっては、ここはまるで別天地だった。牧師さんの説教にはもう一つピンとこないものがあったが、キリスト教に触れたことはその後一生を通じて幸太郎の人生に決定的な影響を与えることになる。

教会員には、偶然のことだが後に結婚した田村忠子の親友もいた。彼女は後に三谷隆正夫人になる。姉さん核の「お文姉さん」もいた。キップがよく誰とでも分け隔てなく話をする開放的な明るい性格だった。とかく引っ込みがちだった幸太郎は、初めて人間らしい開放された気持ちを味わった。お文さんは、後に紅松雄二氏と結婚し、幸太郎におおきなチャンスを与えてくれることになる。教会員は士族階層が多く、知的で文化的な雰囲気もあった。ここで、幸太郎は将棋の愛唱歌になる賛美歌を知る。

「天なる我が家を/仰ぎ見れば/涙にかすめる/目も晴れにけり」

悲しみの人だった幸太郎は、人のあたたかさをしる。ここで悲しみを超えるものを味わった。キリスト教によって、いままでの暗い、やるせない涙を流したことも多かったが、ここではそういうものが洗われる感じがした。出来れば、クリスチャンホームをもちた意図、おぼろげながら感じた。

この時代には、中学に入って、自由度を膨らませた。いままで馴染みのなかった本町にも出かけてゆく。習字を習うためである。漢学や習字は、やはりかつての武士だった士族階層に伝わっている。幸太郎はもともと素質もあったし、好きだった。みるみる上達した。筆で字を書くことには生涯喜びを感じていた。

5. 中学卒業前後

中学は五年で卒業する。新たな世界が開け、楽しかった学校生活も終わろうとしている最後の年には問題が多かった。上級学校への進学と、家庭内のごたごた。とくに家庭内の問題は心身を悩ました。

養父と養母の仲が割れてきた。養母といていたが、本当は籍がはいっていない。長い間、養父と同棲してきたという女性だが、どこからか駆け落ちしてきたのだろうか。だから、幸太郎には母親というものはない。その養母はもともと派手好きだった。いい加減に養父との生活に飽きが出て、若い男と駆け落ちしてしまった。相手は、村上のものではない。西洋理髪店にくるのは、ちょっと格好の良い男だ。養父は荒れる。「お前が駆け落ちを手伝ったのだろうか」とあらぬ疑いをかけて非難を浴びせてくる。世話になった養父だが、幸太郎もつくづくいやになる。確かに、かわいがってくれたし、中学にも上げてくれた養父には感謝はしているのだが、こうこじれてくると、血の繋がらない仲は悪いほうにでてくる。これは、他人には訴えられない。そのはげ口はない幸太郎は、次第に無口になってゆく。

親友の大島や中山は大学に進むという。二人とも、東京帝国大学予備門が第一高等学校と名称を変えていたがめでたく合格する。地方の俊英が進む最高の道である。岡村先生の仕込みで、皆英語はできたから、容易に合格出来たのだろうか。しかし、東京は遠い。新潟まで出て、そこから長野、軽井沢と信越線を通して遠回りして東京へでる。清水トンネルができて、前橋から新潟に直結できる上越線ができたのは昭和に入ってからである。もちろん、幸太郎も東京へ出て勉強したかった。だが、何よりも学資をだしてくれるところがない。中山は村の名主だったから、山林、田畑などをいくらか処分すれば金はでる。大島には例の「鮭の子」の特権がある。

しかし、幸太郎の養父にはそこまでの金はない。養父も連れ合いに逃げられてからは、店に熱が入らなくなってくる。当然に収入も減る。こんなときに、上級学校に行きたいとは絶対にいえないし、実現するはずもない。それよりも、あれ以来養父との仲は決裂状態になっている。中学卒業の頃には、養父とも絶好状態である。幸太郎は自分の運命がつくづくいやになった。

学校への金をだしてもらうことはできない。それに、幸太郎は平民で士族ではないから、いくら勉強ができて「鮭の子」の恩典に預かることはできない。福沢諭吉はその自伝のなかで「門閥制度は親の仇でござる」と書いたことは有名だ。幸太郎も、このときほど士族と平民の差を思い知らされたことはなかった。諭吉の場合は、それでも藩の恩恵を受けて大阪に勉強に行かしてもらっている。幸太郎の場合は、門閥の差どころではない。士族と平民の差が上級学校に上がれるかどうかにかかっている。だがどうすることもできない。勉学の志は高かったが、泣く泣く親友二人を東京へ見送る。幸太郎は一人、村上に取り残されることになる。

幸太郎は淋しかった。親友たちも東京の最高学府に進めるのだから、自分にもその資格がないはずはない。だがそれはかなわぬ夢であった。その上、語り合う相手もない。幸太郎は無口になってゆくほかはない。梅津との関係もますますこじれてしまっている。元の田村の家では幸太郎の長姉の長男が大工を継ごうと修行中だが、世界が違ってきてしまった。幸太郎は天涯孤独である。

とりあえず一人で食べてゆかなくてはならない。中学卒業後は、村上の在にある女川村の小学校で代用教員を務めることになった。中学校を出てすぐに学校の先生というと驚くかもしれないが、当時の小学校の訓導になるための養成機関である師範学校は中等学校扱いで、高等小学校を出てから5年間学ぶ。幸太郎のように、高等小学校から中学校に上がっていた状況では、師範学校と中学とは就学期間も卒業年齢も同じだ。師範学校を中学校から専門学校へと格上げしたのは、最近の第二次大戦中のことである。それまで師範学校は中等学校だから現在の夏の全国高校野球（以前は全国中等野球）大会に出場していた。幸太郎が中学校を卒業してすぐに小学校の先生をしても、べつにおかしくはない。もし、そのまま村上にいたなら、小学校訓導の資格をとってそのまま先生を続けていたかもしれない。

若い先生は背も高くスマートだ。英語も話せる。小学校といっても、高等科では今の中学校2年生にあたる。幸太郎はけっこう女生徒たちにもてた。ずいぶんの後までも、手紙をよこした女生徒もいた。それも多少の慰めとはなっても満足できない。親友たちがいま東京で勉強していると思うとなおさらだ。「自分も東京へ行って勉強したい」そういう思いは募るばかりだが、話をする人もいない。悶々とするばかりだが、それでも向学の思いを捨てることはできなかったから、なんとしてでも東京へ出掛けていっただろう。

満20歳になって徴兵検査を受けた。このころ日露戦争も終わって、軍備縮小のときだった。幸太郎は人より背も高く、頑強なのだが、ただ近眼だったという理由だけで丙種になった。丙種とは兵役に行かなくてもいいということだ。

また成年に達したときに、幸太郎は「梅津幸太郎」からと「田村幸太郎」に姓を戻した。田村には何も当てにする親戚もないし、そんなことを考えたこともなかったのだが、梅津の養父と決定的に絶交状態になった以上、梅津姓に止まっておれなかった。梅津という自分を清算してしまいたかった。自分の意思ではなく養子になっていた幸太郎は、ここから独立を宣言し、新たな自分を始めるという意味であつたろう。

6. 寧波（にんぼう）・上海

そんな悶々とした日を送っていた幸太郎に、一通の手紙が中国、当時の清国から届いた。村上教会で一緒だったあの「お文姉さん」からである。お文さんは、紅松雄二氏と結婚して、いまは紅松文だ。紅松氏は東京高商（いまの一橋大学の前身）の出身で、そのとき中国の寧波で税関長をしていた。当時の中国、つまり清国では税関は汚職、密輸入の温床だった。そこで、清国人以外の外国人を高級で採用することを列強から強制された。清国は自国の税関でありながら、外国人を長に頂くとする不条理を強いられていた。日本人も日露戦争後のことだから、列強の一員として税関長を受け持っていたわけだ。

外国人税関長は給与も高いし、生活はすべて西歐式で、何人も清国人を雇用して優雅に暮らしている。それでも、汚職や不正をされるよりもよほど安くついたのであろう。何しろ清国末期の税関の汚職は桁外れにひどかったから。

手紙は、その寧波に来ないかという誘いであった。お文さんは、見込みのある幸太郎が、小学校の代用教員で悶々としている様子を見るに見かねて手紙をかいた。これは、幸太郎を村上から抜け出すために差し伸べられた救いの手であった。「なにはともあれ、村上から離れたたい」そう思っていた幸太郎にとって天にも昇る心地であったろう。村上の差別社会、養父梅津とのこと、こんな社会に長く止まりたくはなかった。

寧波の生活は楽しかった。紅松雄二氏はクリスチャンでイギリス式の紳士である。税関長ともなれば、社交が中心の仕事でそんなに忙しいものではない。彼はパンヤンの天路歷程に打ち込み、その研究に余念がない。万卷の書物（もともと当時はすべて洋書である）に囲まれ、まるで学者のような生活をしてきた。そこに若い幸太郎が居候として舞い込んできた。歳はそう違わないが、片や税関長、一方は居候なのだから、召使か書生のように扱ってもよかったはずだ。だが、紅松氏は洒脱な人柄で、威張ることが嫌いだ。若い幸太郎を昔からの友人のように扱ってくれた。

幸太郎は若いながら紅松氏と対等に話ができる。パンヤンを語り、ダンテを語った。お文姉さんは相変わらずしやしきしゃきと家を切り回し、いつも明るい。自分もできればこんな明るい女性と清潔で暖かなクリスチャンホームを持ちたいという夢が芽生えてきた。梅津の家は、あまりにもそれと対称的だったから。

紅松家にはたくさんの子供たちが次々に生まれる。幸太郎はその遊び相手をするくらいが仕事だった。紅松家は、すっかりイギリス風である。テーブルで食事し、ナイフやフォークを使うのも慣れてきた。マナーも身についてくる。まだ日本ではそれほど流行ってはいないテニスをし、陸上のホッケーもやった。体格のいい幸太郎は上達も早い。テニスにはすっかり入れ揚げたてで止められない。いままでの村上とは全く違う生活が展開していった。後に、よく幸太郎はイギリス紳士のようなだといわれた。身だしなみをいつもキチンと整えていたからだが、その基礎はここで養われた。

寧波の生活は豊かだし楽しいが、いつまでもただの居候でぶらぶらしているわけにもゆかない。英語のできる幸太郎は貿易商社の仕事を得て、上梅で働くことになった。上海はその頃から経済活動の最も活発な都市だった。イギリス租界、フランス租界、共同租界などがあり西欧人に支配されている。国際的な組織の暗躍する都市でもあった。

日本からは中国大陸の門戸で、定期の船便もあった。その定期便に宝田一蔵が機関長として乗っていた。一蔵は、幸太郎と同じ村上中学出身の2年先輩で、キリスト教会でも一緒だったから旧知の間である。基町出身だから、鮭の子の奨学金を貰い商船学校（現在の商船大学）へ行った。一蔵は親から受けた銃砲店の権利を弟に譲り、好きな船乗りになっていた。たまたま上海航路に乗っていたというわけである。

そんな、ある日、一蔵は新婚の細君、愛子をつれて上海にやってきた。細面の美しい新妻は、見慣れぬ上海にとまどったが、それなりに楽しんでた。ある夜、フランス租界を歩いているときに、あわただしく人を追ってくる清国人の警官がいた。警官は逃げてゆく男を追って発砲する。誤って愛子の腕にあたってしまった。かすり傷ではあるが、服を血染めに

してしまう。一蔵はあわてた。幸太郎は、一蔵と違い上海に定住していたわけだから、とりあえず、近くの自分の下宿に連れてゆき、応急手当をしてから医者に行った。

幸いに重傷ではなく、骨にまでは異常がなかったからいいが、魔都といわれた上海のことだ。新婚の愛子は気も動転したことだろう。幸太郎に深く感謝し、日本に帰ったらぜひ尋ねてくるように言った。なにが縁になるか分からない。この偶然の出来事が、その後の幸太郎の運命を大きく左右することになる。

7. 日本への帰国と東京帝国大学法学部図書室

寧波、上海生活も長くなった。20歳台も半ばを過ぎてきた。今と違って、この頃はもう立派な大人だ。先のことを考えると、紅松氏に頼ってばかりもおれない。日本に帰りたい。ただし、村上だけはもう戻りたくなかった。東京へ行く決意をする。上海からの船は荒れた。買って来た(甕)が船室をごろごろと走りまわるしまつだった。前途多難を思わせたが、なにか期待に胸膨らむものがあった。もちろん東京へ行くのはこれが初めてである。

東京では、恩師の岡村先生にも久し振りに会って歓待される。親友の中山は胸を患って一高を卒業しただけで、国に帰っていた。その後、気候のよいところということだったのだろう。静岡県沼津で中学校の先生になっていた。大島は東京帝国大学工学部建築学科を出て技師として逓信省に勤める。官庁建築としては、逓信省は花形だった。しばしば会っては語りあったが、やはり親友と話しをするのは楽しい。岡村先生や大島と会っていると、また大学に行って勉強したいという意欲に駆り立てられる。

東京へ来たということは、苦学してでも勉強したいと考えたからでもある。だが年齢もいって来たし、何よりも金がない。そこへ、東大法学部の図書室で人を募集しているということを知りつけた。応募するとすぐに採用された。法学部図書室に勤務する。壁中に書棚が巡らされ、本に埋まったなかに、小さな机がひとつある。当時のことだ。電灯は暗い。そのなかで本の整理や、本の購入事務などをする。慣れていた帝国大学の真っ只中で、今自分は本に囲まれている。ぞくぞくするほど興奮した。

しかも、法学部には著名な先生がすぐ身近にいて、声もかけてくれるし、話もできる。後に東大総長を務めた小野塚喜平次が教授でいた。吉野作造もいた。法律学の方にはあまり興味もてなかったが、こうした政治学の先生方には大いに関心があった。先生たちも、学問に興味があり、熱心な幸太郎青年に関心をもったのだろう。清国に行っていた話にも興味がある。著名な二人の先生には、大学をやめてからも現況などの手紙をかいた。幸太郎の達筆の手紙を見て、この先生たちは丁寧に葉書で返事をかいてくれた。大学に入って学生になってもできないような親しい交わりをすることができた。

だが、幸太郎は悩んだ。この生活は楽しいが、あまりにも給料が安い。法学部の資料室勤務というのは、正規の職員ではなく、ごく低い雇いという身分だ。まだ、独身ではあったが、これでは到底妻子を養うことはできない。ここにいくらいても、学者になれるわけではないし、資格をとるといってもない。中学のときに果たせなかった思いを、形を変えて

いくらかでもの慰められたことで満足しなければならない。幸太郎は短い期間だったが、大学を去った。三四郎池のほとりを廻っていると、法学部の研究室も見える。残念ながら、ここは自分の一生を託せる場ではない。

8. 浦和の吉田家

宝田一蔵も船乗りでは、西欧航路などになると、長期間家を空けてしまう。妻もかわいそうだということになり、後藤新平の下で活躍した長尾半平の世話で東京市の水道局に技師として入ることになった。機関長だったから機械には強い。海から陸に上がってしまっていまは東京にいる。

早速、宝田の家にもゆく。東京市水道局の公舎に住んでいた。愛子の両親は浦和でキリスト教会の牧師をしていると聞かされた。両親も、上海でのお礼をいいたいから浦和まできてくれという。吉田亀太郎牧師は、岩手県の生まれで、石巻で過ごし、若い頃は新潟に来て石油採掘に携わっていた。たまたま新しくできたキリスト教会を覗いて見た。新潟にキリスト教の伝道にきていたパーム師や押川方義の話聞き強く感動する。亀太郎とまち子はそのとりなしで結婚し、亀太郎はキリスト教伝道師の道に入る。東北の田舎の教会をずっと廻っていたが、晩年になって埼玉県に回り、越谷教会から最後は浦和教会の牧師になっていた。

亀太郎の夫人まち子は、新潟市の中心、古町の出身だ。幸太郎は新潟に縁がある二人に会ってやはり懐かしかった。これをキッカケに、幸太郎はたびたび浦和の吉田家を訪ねることになる。ただし、幸太郎は浦和教会の会員になったわけではない。午後、遊びに来て、吉田亀太郎夫妻や、そこへやってくる宝田愛子、その柿妹たちと話をしにくるだけである。亀太郎は一男五女だが、愛子はその四女だ。まだ、結婚していない末娘の忠子がいた。活発な忠子は絵を描いたり、音楽が好きだった。上野の音楽学校に入ったが、学資が続かずやむなく中退して、少し荒れていた。末娘でもあり、多少我儘で甘えん坊だが、活発で面白い娘だとみた。自分にはない明るさに関心をもった。だが、自分の嫁さんにくれなどは到底いえない。自分は天涯孤独で身である。

それに、忠子は、音楽学校をやめた後、山形で教会付属の幼稚園の先生であり婦人伝道師として仕事をしていた。山形県の上の山は、かつて亀太郎が牧師をしていたこともあり、忠子が小学校を卒業したのは、上の山だった。だから山形近辺には土地勘もあった。ただ、体が弱く、病気をしてはよく浦和に帰っていたので、しばしば幸太郎にも会った。愛子夫妻、その上の姉である兵頭操夫妻などもよく顔を出した。それにまだ、嫁に行かない末の忠子がいた。この頃のキリスト教会ではこうした交わりは普通だったし、幸太郎もすでに村上での経験もある。

まちこはよく娘の忠子にこういった。「田村さんはよい人だけど、ああ職を変えるのではねえ」。幸太郎は、東京帝国大学の法学部の資料室をやめ、上海で貿易商社の仕事をしていた関係で、東京でも小さな貿易商社に勤める。第一次大戦の景気で、あわよくばということでも生まれた小さな会社はよく潰れた。上級学校の学歴もなく、伝もない幸太郎は、新聞広告

などで仕事を探すほかはなかった。幸太郎はやむなく転職して次の職を探さなければならなかが、「また代わったの」と浦和での評判はよくなかった。

9. 日本ナショナル金銭登録機株式会社

会社を転々とした挙句に就職したのは、日本ナショナル金銭登録機株式会社（現在のNCR）だった。アメリカのデイトンに本社をおくアメリカ系の会社だった。支配人はアメリカ人が派遣されているバーマン氏だった。話はすべて英語だ。英語のできる幸太郎には都合がよかった。上海ではイギリス人やたちとアメリカ人たちと生の英語を使う機会が多かったから、日本に止まっていて和製英語しかできない日本人たちよりはいける。

金銭登録機とはキャッシュレジスターの訳で、店の出入り口において金銭の出納を扱う機械である。今ならパソコンだが、当時ほどこの店もソロバンと大福帳で間に合っていた。そこに、高価な機械を売るとなると、ただ押し付けや（誤魔）化しで売るのではなく、店の会計システムの近代化をはかる必要がある。セールスマンには、経営の合理化をはかるコンサルタントのような立場も必要だった。お店の身になってめんどうをみる仕事は、勉強好きの幸太郎には向いていた。幸太郎はそれなりに実績をあげてゆく。セールマンは知らない初対面の人にもよい印象を与えるように、身だしなみが大事だ。紅松氏の所で、イギリス流を習ってきた幸太郎は、身だしなみには気をつけていた。長身の幸太郎は、なかなか格好のよい紳士に育っていった。

戦争中の中断はあったが、けっきょくこの会社に定年まで勤めることになる。しかも、幸太郎のもっている才能を引き出してくれる。アメリカ人との接触も彼にとっては得意の分野だった。営業でもそれなりの成績を上げたのだが、セールスマン教育に携わるようになったからである。それには、さまざまな勉強をしなければならない。もともと勉強好きの幸太郎にとっては、最も適した分野だった。ずっと後のことだが、晩年は会社を離れて、セールスマン教育の第一人者として各地の講演や指導、執筆に携わるようになる。

10. 内村鑑三と結楯

幸太郎の生涯大きな影響があったのは、ナショナル金銭登録株式会社に就職したことと、もうひとつは内村鑑三の集會に出席するようになったことである。その頃、内村鑑三が、新宿の柏木で、いままでの教会とは違う聖書講義をしているということが若者の間に伝わっていた。一高や東大の俊英たちが、その下に多く集ったが、また散っていった。内村は日露戦争のときに非戦論を唱えて論壇に登場したり、第一高等学校では勅語に敬礼しなかったということで退職させられたり、話題の多い人物だった。キリスト者ではあるが、どこの教会にも属していない独立伝道である。

時々、一般の人々が自由に聞きにいける講演会を開いていた。幸太郎は一度話しを聞いてみたいと思った。だが、自分一人では少し気後れがした。東大生がよく話を聞きに行った

ということもあるので、親友の大島を誘った。期日に待ち合わせの場所でいくら待っていても大島は現れない。やむなく、幸太郎は一人で聞きに行った。

講演を聞いてすっかり感動した。牧師さんの話ならば若いときから何度も聞いている。だが、こんになに力ある話は聞いたことがない。生きる力になるものだった。幸太郎は、早速毎日曜の聖書集会への参加を申し込んだ。それ以来、柏木の聖書集会を鑑三が亡くなるまで続けた。亡くなってからも、その弟子の塚本虎二、さらに第二次大戦後は、東大の総長もした矢内原忠雄の集会に通った。この信仰は、もともと正義感の強かった幸太郎のさらにバックボーンになった。

浦和の吉田家には、あいかわらずときどき遊びに行っていた。まち子は内村の集会に通いだしてから幸太郎の変化を目ざとくみついていた。もともと身だしなみはよいが、少しキザな感じもあった幸太郎が、相変わらずキチンとはしているが、それなりに落ち着きができてきて、芯がとおってきたということだ。教会の牧師である亀太郎から見れば、内村鑑三の会に行くものは教会を否定する考えだから、よくは思わないはずなのだが、亀太郎、まち子の二人はそんな偏狭な考えは持たなかった。

「この人なら、我儘な忠子と結婚しても、じっと包んでいってくれるのではないだろうか」そう考えたまち子は、忠子に幸太郎との結婚を勧めた。アメリカ人が教える横浜の女学校で学んだ忠子は夢多い乙女だった。忠子を慕ってくれた青年がいたが、家の反対にあい難航していた。青年は病に倒れ、明日をもしれない身になり、病床で婚約をした。まもなく青年は亡くなる。忠子は音楽学校をやめ、またここでも夢がつぶれていた。幸太郎がよく浦和の家に入出入りするのを知っていた、が、まじめだが仕事をしょっちゅう変わる少しキザな人という印象で、結婚の相手としては、全く関心をもったこともない。

それに、幸太郎が中学卒というのも気に入らない。すぐ上の柿、愛子の夫は商船学校出だ。その上の操の夫は早稲田大学を出て、帝国ホテルに勤めている。ずっと上の姉の道子はアメリカにいるが、夫は東京高等師範（いまの筑波大の前身）出身。皆、高等教育を受けている。自分自身だって上野の音楽学校（今の東京芸術大学）には入った。中学出でも当時としては立派な学歴なのだが、忠子には気にいらなかった。後になると、幸太郎が如何に読書家で本をよく読むインテリかということを知った。親もいない親戚ない天涯孤独の身の上だという。あまり気は進まなかったのだが、大好きな母まち子の意見だし、それほど母が進めるならと結婚することになった。

結婚式は、姉の操の家の座敷だ。父親の吉田亀太郎の司式だった。ささやかな結婚式だったが、孤独な幸太郎にとっては、これまでの生涯最良の日であった。数え歳で幸太郎32歳、忠子24歳であった。今の満年齢では幸太郎31歳だが、当時としては二人とも遅い結婚だった。女性の場合に10歳代で結婚することは珍しくなかった。男子でも30歳を超えた独身者は敬遠されたものだ。

忠子の希望で、まだ稀だった新婚旅行に行くことにした。場所は鎌倉の海浜ホテルである。鎌倉は出来たばかりの横須賀線が通じている。東京からはリゾート地だった。ホテルで

食事をすますと、忠子を一人置いて、幸太郎はどこかへ行ってしまった。浜へ出てみると、若者たちが火をたいて何かしている。それを見ている幸太郎を見つけた。長い淋しい生活から脱して、いよいよ、新しい家庭を持てるということに、どう対応してよいのか分からなくなっていたのかもしれない。

新居は田端だった。今では考えられないが、田端文士村というのもあり、ちょっとした郊外住宅地だった。ここは、忠子の実家の浦和にも便利だということで決めたのだろう。新婚にあたって、幸太郎が忠子につけた条件がある。それは一緒に日曜の午前に内村鑑三の集会にゆくということだった。

1.1. 家庭生活

家は、その後、大森に移り、ここで関東大震災に会うが無事だった。その後、蒲田の蓮沼を経て東京の青山に移る。この頃の転居は、忠子の姉妹たち、とくに仲のよかった兵頭操姉についてゆくというパターンだ。結婚してから6番目に住んだ家が、青山高樹町である。日赤中央病院の正門前からまっすぐに行ったところだった。いまででは、一番広いいえだった。5分もかからないところに操の家があり、歩いて10分もかからないところに、浦和から引退した忠子の両親が住んでいた。

子供は、忠幸、義也、明、千尋と4人男の子ばかりが生まれた。忠子は女の子を欲しかった。この時代には、中流の家庭でも今でいうお手伝いさんを置くことができおきつきあいはなかったのだが、子沢山の農家の口減らしをかねて、都会に若い嫁入り前の娘をお手伝いさんに出すのは普通のことだった。彼女らは食べさせてもらえば、ごく安い給料で雇われた。こうしたことから、幸太郎の家にも米さん、りんさんがきた。たいていは二、三年いてどこかにお嫁にゆく。「十五で姉やは嫁にゆき」と赤とんぼの歌にあるとおりである。この時代には家庭電気製品は皆無だから、掃除、洗濯から、米も薪や炭で炊いたから火加減を見るのも大変だった。だから、お手伝いさんなしにはやってゆけなかったろう。そこへ、田村しんが来た。しんは幸太郎の長姉の末娘だった。長姉は田村家を継いだ人で息子は家業ともいべき大工になっていた。だが、幸太郎は村上を出て中国に行ってから、一度も帰ってはいない。だいたい関係もなく、返るところがないのだ。つきあいもなかったのだが、しんの面倒をみてくれということになった。しんは、小学校をでて紡績工場などで働いていたが、生来少し耳が不自由だった。まだ満で十五くらいだったろうが、幸太郎の東京の家でお手伝いさんのように住むことになる。その後、一生を幸太郎家でおくる。

この時代、子供らをつれて一家で散歩をよくした。飼い犬がついてくる。最初に飼った犬の名はポピイだった。青山のあたりでも結構散歩するのに事欠かなかった。家が変わっても、その家の近所で散歩をした。日曜の午後には、幸太郎はよくテニスに行った。家庭内では、忠子が西洋式にあこがれていた。ちゃぶ台ではなく、狭い部屋に無理に楕円形のテーブルを持ち込み、椅子式の食卓を囲んだ。

幸太郎は、内村鑑三の影響からか、天文学に興味を持っていた。分厚い上下2巻の天文学の本で、ときどき解説をしてくれた。その頃まだ珍しかった天体望遠鏡を購入した。よく晴れた夏の夕方などは、庭で天体観察をした。月はもちろん、火星、木星、土星を望遠鏡でみた。東京の空もまだはるかに澄んでいたということだ。

それに、エンサイクロペディア・ブリタニカを買った。当時の月給の何倍かしたようだ。日本流のボーナスがないのだが、営業成績が上がったときに、特別の金がでたのだろう。たまたま入ったせかっくの大金を望遠鏡やブリタニカにつぎ込んでしまい、忠子はもっと家庭の必要なものに使うべきだと大いに憤慨した。幸太郎は、いざというときには思い切りがよかった。子供の頃、養父にはけっこうほしいものを買ってもらったようだ。

貧しくはあるが、ちょっとしゃれた生活を送っていたといえるのだろう。まともな、家庭生活を知らない幸太郎と、質素だが温かいクリスチャンホームで育った忠子とは、はじめはずいぶん食い違いがあったようだ。やさしく、紳士だと思っていた幸太郎は、案外頑固で、怒りっぽいところもある。一度機嫌が悪くなると口をきかない。そんなことに忠子は困ったことも多かったが、母親が青山の近所に住むようになったから、何かというと母親のところに行った。忠子が働きに出るようになったころから、ようやくお互いを認め合い、しっくりするようになった。

新婚からまだ3、4年しかたっていない頃、大事件があった。ながらく絶好状態だし、音信も途絶えていた幸太郎の養父が、突然に女を連れて東京の幸太郎の家に現れた。「これから、ここに世話になって居らせてもらう」というのだ。養父はレプラになって、その症状も表れていた。忠子は、二人の幼子を抱えて仰天した。今でこそ、レプラは治療可能な病気だが、この時代には不治の病とされ、非人道的だと非難される隔離政策をとっていた。子供にうつたら大変だ。幸太郎は、絶交した養父ではあるが、大いに世話になり今日あるのは養父のおかげだ。ほうっておくことはできない。幸太郎は、養父を施設に入れるように、仕事を放り出して奔走した。ようやく、岡山の愛生園に入ることになる。後に、養父はキリスト教に入り、ここで生涯を終えた。

12. 昭和の不況と転居、忠子の就職

平和な幸太郎の家庭にも、昭和の不況の波が押し寄せた。ブラックマンデーというニューヨーク株式の大暴落の起きたのが昭和4（1929）年である。アメリカ系のナショナル金銭登録器も大きな打撃を受ける。日本資本を入れて、藤山財閥が加わり、名称を日本ナショナル金銭登録器株式会社と変更し、藤山愛一郎が社長になった。

社員の給料も大幅カットされた。4人の子供を抱えてやってゆけない。まずは家賃の低いところに引っ越す。この時代には、貸家札を表の扉んひ斜めにはりつけた貸家がたくさんあった。かなり大きなものから小さなものまで、種類も多い。渋谷区の上智に引っ越した。ここでは家が狭いから、大きないす式の食卓は持ち込めない。幸太郎は食卓の足を鋸で切り、椅子は処分した。

忠子も働きに出ることを考えたがなかなかいい所がない。そこに、また子供生まれた。忠子の欲しがっていた初めての女の子、しかも双子だった。一人は出産後まもなく死んだ。一人は小さな未成熟児だった。「初穂」と名づけたが、2週間ほどで亡くなる。ここで、忠子も本格的に働く決心をする。絵や音楽が得意な忠子は、幼稚園の先生になろうと考えた。そのためには保母の養成所へ通ってまず資格をとらなくてはならない。西荻窪にある玉成保母養成所に生徒として通うことになった。家からは恵比寿の駅に出て、西荻窪にゆく。忠子は、4人の子持ちで、若い女学校出たてのこらと一緒に勉強することになる。

保母養成所では、絵を描いたり、オルガンをひくなどというのは、もともと忠子の得意の分野だった。しかし、音楽に合わせて踊るリトミックというのに、若い子と一緒にブルーマをはいて踊らなければならない。しかし、家庭を守ろうという忠子は必死だった。フレーベルの恩物というものを使った教育を取り入れていた。児童の発達に合わせて、考えながら遊ぶ道具である。講義だけでなく、それを使ったバリエーションが宿題として出る。夜になってから、幸太郎も手伝って翌日の宿題をやっていた。ほかの若い子たちとは、格段に違うから、玉成保母養成所のアルウン所長は忠子を重くみるようになった。卒業してからも、専攻科に残って園長を補佐するようになる。苦しい家のやりくりも一段落がつき、一家は忠子のことを考えて、玉成に近い西荻窪に引っ越した。善福寺池に近い静かなところであった。一家で散歩する場所もたくさんあった。